

壬戌紀行 一名木曾の麻衣

資料一五

美濃土宿のまき大湫宿之部 興
通行は享和三年癸三月二十七日のこと也

大田 南 畝

細久手の驛に入れば。左の方なる林の中に鳥居あり。石坂のみゆるを何ぞと問へば。産土の神なりと答ふ。驛舎のさまわびし。お六櫛をひさぐもの多し。松の間の山道をゆくに。右左みな谷なり。此あたりより馬酔木の木多し。道。深きやう(桔梗)などいへる花もあり。左右の空についで遠山つらなれり。一里塚をこえて芝山の背をゆく事長し。左の方に小き池あり。杜若生ひしけれり。池の中に辨財天の宮あり。なほ松なみの中をゆきて。人家わづかに二三戸あり。人のすめるはたい一戸なり。一つ屋の立場といふ。右の方に遠く笠のごとくみゆる山を笠若山といふ。夫より猶右のかたに雪をいたいけるはかの御嶽なり。猶琵琶坂をのぼる事数歩。琵琶峠といふ。道に石多し。山の嶺より見れば。もろ／＼の山遠くみわたさる。こゝよりは伊勢尾張の海もみゆと云。これより坂を下る事十町ばかり。山には大きな石いくつとなく。長櫃のごときもの。俵のごときもの。敷をしらず。道の左にたてる大きな石二つあり。一つを

鳥帽子石といふ。高さ二丈ばかり幅は三丈にあまれり。また母衣石といふは高さはひとしけれど幅はこれに倍せり。いづれもその名の形に似て。石のひま／＼に松その外の草木生ひたり。まことに目を驚かす見ものなり。ゆき／＼て大久手の驛に在る。左のかたに鳥居みゆるは何の社にや。驛の中なる左のかたに大きな杉の木あり。木のもとに神明の宮をたつ。驛舎のさま細久手に似て。それよりも人家すくなし。これよりいはゆる十三峠とやらんをこゆべきに。飢ゑなばあしかりなんと。あやしきやどりにいりて晝の餉す。庭に石楠ぐさの花さかりなるにも。わがやどの花いかいならんとし。道の右に山の神の社あり。例の輿より下りてあゆむ。輿かくものに委しく問ひて。十三峠の名をもしるさまほしく思ふに。たゞに十三のみにはあらず。くはしくもかぞへきこえなば。二十ばかりあらんと。輿かくものいふ。はじめのぼる坂を寺坂といひ。次を山神坂といふ。まがり／＼てのぼりくだり。猶三四町も下る坂の名をとへば。しやれこ坂といふ。右の方に南無観世音菩薩といふ石をたつ。向ふに遠くみゆる山は。かの横長たけなり。地藏坂といふ坂を上れば。右に大なる杉の木ありて。地藏菩薩たせ給ふ。又俗におつるが茶屋の坂ともよぶ。おつるといふ女の茶やありしより。かくいひならせしとぞ。すこし下りて又芝生の松原をのぼりゆく事四五町。あやしき石所々にそばたちて赤土多し。曾根松の坂といふ。又坂を下りゆくに。左のかたの石より水ながれ出るを順禮水といふ。つねにはそのみ水も

出ねど。八月一日には必いづるといふ。むかし順禮のもの。此日此所にてなやみふしけるが。此水のみて命たすかりしより。今もかゝる事ありといへり。一里塚をすぎ臨の木坂を下りて。俗に炭焼の五郎坂といふを下れば炭焼の立場あり。左に近くみゆる山は権現の山なり。しばし立場に興たてゝいこふ。壚をつたひて細く流るゝ水に櫻の花のちりかゝるが。さゝやかなる土くれにさへられてめぐりめぐるもあり。又はさきにながれゆく花びらの跡より流るゝ水にせかれて。おくれてちれる花びらのよどむまもなくこえゆくを見るに。桃花水にながれて杳然として去る。别有天地非人間。とひとりごたる。軟骨といふ坂をすこし上り。権現坂を下る事五六町あまりにして。人家三四戸あり大くごといふ。これより左右の谷にのみて山路をゆく。新道坂を下る事三町ばかりして。茶屋の原といへる平地を得たり。向ひ茶屋の坂を下る事急にして。すこしく上る坂を茶屋坂といふ。こゝにはが茶屋とてあり。又坂を下る事六七町あり。猶名もしれぬ坂を下りて深谷村にいたる。人家十餘戸あり。左右に田ある所をゆきて土橋をわたり。やゝ下りゆきて。又黒すくもといふ坂をのぼる。猶のぼる坂をべに坂といふ。左の方に蘆のかりぶきして餅うるう三人ばかりあり。一里塚をこえて大井までは。いくばく里と問ふに。二里ばかりありといへば又奥にのる。これより下りゆく坂の名をとふにしらず。人家一二戸あり。よつやとへる所にや。こゝにも一木のいせ櫻さかりなり。いせ櫻とは。をはり

に近しといへる事よし。こゝも又美濃のくになれば。さもあらんかしとひとりえまる。うつ木原といふ坂を下りて。石はしる音すさまじき流あり。わたせる橋をみだれ橋といふ。みたらしの坂といふを上る事五六町にして。山のいたゞきより見れば。左右の山ひききみゆ。やゝくだりゆきて右の方に。石の燈籠ふたつたてり。いせ道と石に忘れり。こゝに假屋して伊勢太神宮に奉納の札をたつ。道のへに一重の櫻さかりなるは遅櫻なるべし。一里塚をへて人家あり巻かね村といふ。追分の立場といふは木曾といせ路の追分なるべし。こゝにもお六橋をひきてひさぐ。なほも山路をゆきくへて又一里塚あり。はじめの道にくらぶればいと近し。松の間をゆきて六七町も下る坂を西行坂といふ。左の山の上に櫻の木ありて。西行の塚ありといふ。圓位上人は讃岐の善導寺にて終りをとりぬときくに。こゝにしも塚ある事いかゞならん。折から谷の鶯の聲をきくもめづらしく。比は彌生の末なるに。道賢在野といふ事も引いてつべし。砂石まじりに流るゝ水にかけし板橋をわたりて中野村あり。右のかたにたてる鳥居は産土の神なり。又はさき流の橋をわたりてゆきつゝ。大井川の板橋をわたり。大井の驛につく。けふは道のほど八里あまりなれど。まだ未のなかばいかりなるべし。

廿八日。天氣よし。大井の驛を出て寺坂を上る(藤波記に。八重羽の坂とあり)。一里塚をへて右のかたにすこし引入て石塔あり。文字なし。これ彌津甚平の墓なりといふ。松原をへて小流